神々の指紋 下

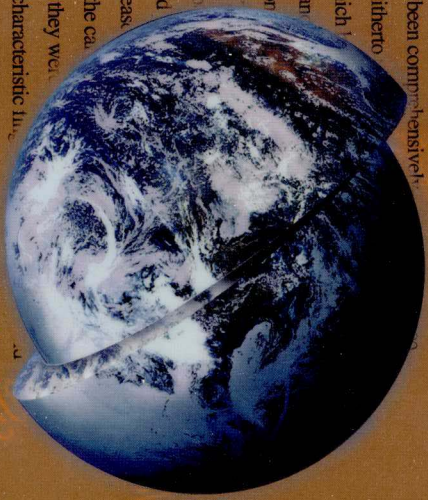
グラハム・ハンコック 著・大地 舜 訳

had made use of, in particular those said to date back to the fourth century BC, had themselves been based on even older sources, which in turn had been based on sources originating in the furthest antiquity.

There was, he asserted, irrefutable evidence that the earth had been comprehensively [illegible] BC by a hitherto [illegible] zation which [illegible] gical advan[illegible]

A nation[illegible] ders, too: [illegible] pyramid [illegible] uld lift and [illegible] apparent eas[illegible] ments to the ca[illegible]

Whoever they we[illegible] left their characteristic [illegible] in the form of cyclopean polygonal masonry, site layouts involving astronomical alignments, mathematical and geodetic puzzles, and myths about gods in human form.



翔泳社

神々の指紋

下

翔泳社

訳者略歴／大地　舜
青山学院大学卒。米国のオピニオン誌『新展望』東京特派員。世界最大の政治コラム「グローバル　ビューポイント」（ロサンゼルス・タイムス・シンジケート）東京特派員。訳書に『大統領の戦争』（実業之日本社）、『右脳開発法』（実業之日本社）、『インナーセックス』（実業之日本社）、『人生のささやかな真理』（実務教育出版）などがある。

神々の指紋　下

1996年2月29日　初版第1刷発行
1996年9月30日　初版第12刷発行

著　者　グラハム・ハンコック
訳　者　大地　舜
発行人　速水浩二
発行所　株式会社　翔泳社
〒150　東京都渋谷区神宮前3-14-12
出版局編集部　03-5411-3032
出版局営業部　03-5411-3020
組　版　株式会社　キャナルコンピュータプリント
印刷・製本　大日本印刷株式会社

©1996 SHOEISHA

本書の一部または全部を著作権法の定める範囲を超え、無断で複写、複製、転載、テープ化、ファイル化することを禁じます。

ISBN4-88135-349-7　C0022

神々の指紋　下

目次

第6部　ギザへの招待状　エジプト1
第33章　方位 …… 3
第34章　永遠の住みか …… 11
第35章　単なる墓標？ …… 23
第36章　変則性 …… 42
第37章　神によって造られた …… 52
第38章　対話式三次元ゲーム …… 68
第39章　始まりの場所 …… 84
第7部　永遠の支配者　エジプト2
第40章　エジプトに残された秘密 …… 103
第41章　太陽の都、ジャッカルの部屋 …… 113
第42章　時代錯誤と謎 …… 123
第43章　最初の時を求めて …… 142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第44章　最初の時の神々 …… 153
第45章　人々と神々の仕事 …… 163
第46章　紀元前一万一〇〇〇年 …… 183
第47章　スフィンクス …… 190
第48章　地球の計測 …… 207
第49章　力の源泉 …… 222
第8部　結論　本体はどこに？
第50章　「無駄骨を折っている」わけではない …… 249
第51章　ハンマーと振り子 …… 263
第52章　夜の盗人のように密かに …… 287
訳者あとがき
注
参考文献
索引

第6部　ギザへの招待状　エジプト1

第33章　方位

一九九三年三月一六日　午前三時三〇分　エジプト共和国ギザ

誰もいないホテルのロビーを通り抜け、道路に駐車している白色のフィアットに乗り込んだ。運転をしているのは痩せた神経質そうなエジプト人で、名前はアリという。アリは大ピラミッドの守衛たちに話をつけたという。アリが不安そうだったのは、下手をするとサンサと私が国外追放され、アリは六か月間刑務所に送られる可能性があったからだ。

だが、もちろんヘマはしないはずだ。だからこそ今朝、アリは姿を現わしたのだ。昨日、アリには一五〇ドル支払った。アリはそれをエジプト・ポンドに変換し、守衛たちにばらまいた。その代わり、われわれが大ピラミッドに登っても、守衛たちは、見て見ぬふりをしてくれるはずだった。

ピラミッドから八〇〇メートル手前で車を止め、そこからは歩いた。ナズラット・サンマーン村にのしかかるようにそびえる急な土手の脇を歩くと、遺跡の北面に到達する。警備の灯が届かない柔らかい砂の上を私たち三人は黙々と歩いた。興奮していたが、同時に不安だった。賄賂が有効か

どうか、アリにも確信はない。

壁の影に隠れて立った。巨大なピラミッドが暗闇の中にそびえ、南の空の星を隠している。北西の角から警備のパトロールがやってきた。寒さをさえぎるために毛布をかぶった三人の夜警は、散弾銃を手にしている。一五メートルほどまで近づいたところで三人は止まり、煙草に火をつけた。アリはそのままでいろという合図を私たちに送ると、一人で陰から出て灯の中に入り、警備員に近づいた。数分間、話をしていたが、それは明らかに熱っぽい論争だった。ようやくこちらに手招きし、話に参加しろという。

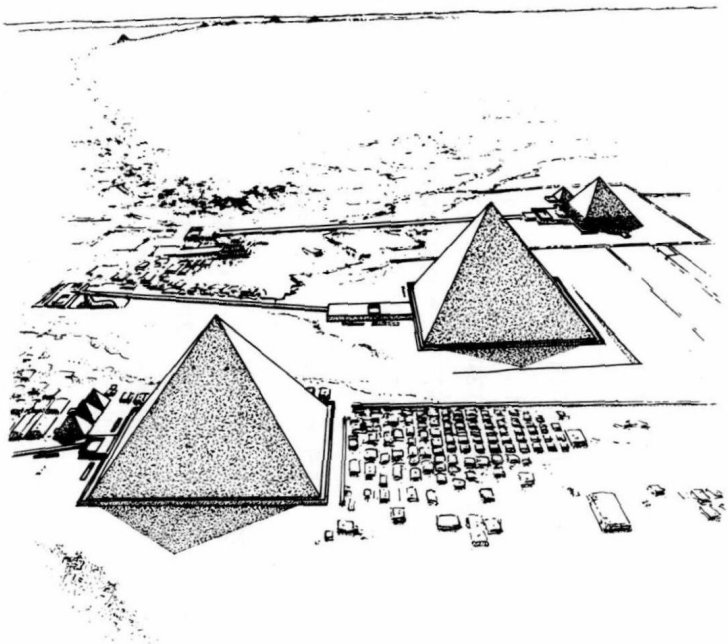
「問題が起きた。ここのボス（無精髭を生やした、背の低い不機嫌そうな男だった）が、あと三〇ドル払わなければ、許可しないという。どうしますか？」とアリ。私は財布をとりだし、三〇ドルを数え、アリに渡した。アリはそれを二つに折りたたみ、ボスに渡した。ボスは金を胸のポケットにしまい、握手を求めてきたので、全員で握手を交わした。

「オーケー、レッツゴー」とアリは言った。

説明のつかない精度

警備員は大ピラミッドの北面を西に向かってパトロールを続け、われわれは北東の角を曲がり西面に出た。

すっかり遺跡の方位を調べる習慣が身に付いてしまっていた。大ピラミッドの北面はほぼ完璧に真北を向いている。東面もほぼ完璧に真東を向いており、南面も西面もそれぞれ真南、真西を向い



ギザを北から南に見た姿　手前が大ピラミッド。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ている。誤差の平均は円弧で三分しかない（南面は二分以下）[1]。このような精度は、いつの時代の建造物だとしても、信じがたいし不可解だ。とくにこのピラミッドが建てられたとされている四五〇〇年ほど前のエジプトでは、不自然なほどの芸当だ。

円弧三分の誤差とは、〇・〇一五％という極微量の誤差だ。ある建築家と大ピラミッドについて話し合ったが、なぜこのような精度を必要としたかを理解できないという。実際に建築をする側からみると、このような精度を達成するためにかかる費用と時間と困難は、できあがる結果から見て採算に合わないのだ。たとえば土台の精度が二～三度狂っても（一％程度の誤差）肉眼では識別できない。だが、〇・〇一五％以内に誤差を保とうとすれば、気の遠くなるほどの多くの仕事が増える。

したがって、人間の歴史の夜明けの時代にピラミッドを建設した古代の偉大な建築家には、東西南北の方位を厳密に保つ強烈な動機があったに違いない。さらに、超人的な正確さで目的を達したこれらの人々は、優れた技術、高度な知識を持つ有能な人々であり、優れた測量や設計道具を持っていたに違いない。この印象はこの遺跡の他の面からも確認することができる。たとえば底辺の四つの辺の長さはほとんど同じだ。その精度は現代の建築家が普通のオフィスビルを建てるときに求められる精度よりも高い。だが大ピラミッドはオフィス・ビルではない。人類が造った最大の最古の建造物の一つなのだ。北辺の長さは二三〇・二五メートル、西辺は二三〇・三五メートル、東辺は二三〇・三九メートル、南辺は二三〇・四五メートルだ。[2] 一番長い辺と一番短い辺の差は二〇センチしかない。したがって誤差は各辺の長さの一％以下だ。

数字を羅列しただけでは、工学的にその数字を達成するために必要な高度な技術や膨大な仕事量が見えてこない。学者たちは、いかにピラミッド建設者たちが、このような高度な精度を保ったかを説明できないでいる。[3]

だが、もっと興味を感じるのは、「なぜ彼らはこのような高い精度の建造物を造る必要があったのか」という点だ。〇・一%の誤差を一～二%にしたところで品質はほとんど変わらないし、仕事も楽になる。では、なぜそうしなかったのか？　なぜ、あらゆる点で、わざわざ困難な仕事に挑戦したのか？　四五〇〇年前に作られた「原始的」な石造りの遺跡だとみなされているピラミッドの造り手は、なぜ妄想に取り憑かれたように機械時代の精度にこだわったのか？

歴史のブラックホール

大ピラミッドには最初から登るつもりだった。だが登頂は一九八三年以来、厳しく禁止されている。向こう見ずな観光客が転落死したため、エジプト政府は禁止せざるを得なくなったのだ。だが、考えてみたらわれわれ一行も十分に向こう見ずなことをしている（しかも夜に登ろうとしているのだ）。さらに基本的には正当と思える禁止令に違反するのは心苦しかった。だが、ピラミッドに強烈な興味を持っており、すべてを知りたいという気持ちが強く、常識を超えてしまっていた。

北東の角で警備員と別れてから、こっそりと東面の下を南に向かって歩いた。

大ピラミッドと、そのすぐ東側にある三つの「補助的」な小さなピラミッドの間には、壊れた舗道石が曲がって置かれており、濃厚な闇に包まれている。そこには三つの深くて狭い、岩でできた

縦坑があり、まるで巨大な墓場のようだ。発掘していた考古学者がこの縦坑を発見したとき、そこには何も入っていなかった。だが、まるで流線型の高性能の船を入れておくために造られたような形に見える。

ピラミッド東面の半分まで来たところで、別のパトロール隊に出会った。今回は二人の守衛で、一人は八〇歳を越えるように見える老人、もう一人はにきび面の若者で、アリが支払ったお金では不足で、さらに五〇エジプト・ポンド欲しいと言ってきた。私はお金をすぐに取りだした。金額のことはどうでもよくなり、逮捕されないうちに早く登り、下に降りてきたいという欲求が強まっていた。

南東の角についたのは朝の四時一五分だった。

現代のビルや家でも、完璧な九〇度の角度を持つ建物は少ない。一度程度は狂っているのが普通だ。それでも構造的には影響がなく、その誤差に気づく人はいない。だが大ピラミッドの場合、古代の建築家は誤差をほとんどゼロにしている。ピラミッドの基底の角度は直角ではないが、南東角は八九度五六分二七秒、北東角九〇度三分二秒、南西角九〇度〇分三三秒、北西角八九度五九分五八秒と精度が高い。[4]

これはもちろんただ事ではない。大ピラミッドに関することは、すべてこのように説明し難いことばかりだ。現代の最高のレベルのものと同じ建築技術を、たった一〇〇〇年で発達させることができたのだろうか？　しかも、エジプトでこのような技術が発展したという記録はなにもない。大ピラミッドもその周囲の遺跡も、建築学の歴史から見ると、底なしのブラックホールから突然に飛

び出してきたようなものであり、詳しいことは何もわかっていない。

砂漠の船

額に汗を浮かべたアリは、ピラミッドに登る前に、なぜ周辺を回るのかを説明してくれない。現在は南面の下を西に向かって歩いている。ここにも船を入れるような縦坑が二つ開いている。この縦坑の一つはまだ発掘されていないが、ファイバー・オプティック・カメラを差し込んで調べたところ、長さ三〇メートル以上の大型木造船が収まっていることがわかった。もう一つの縦坑は一九五〇年代に発掘されている。この中には海を渡ることもできる長さ四三・四メートルというさらに大型の船が入っていた。[5] 現在この船は、ピラミッドの南側にある醜い近代建築のボート博物館に収められている。

杉の木で造られたこの美しい船は、建造されてから四五〇〇年たった現在でも完璧な状態で博物館に収められている。排水量約四〇トンのこの船の設計は、専門家によると奇想天外なものだという。「外海を航行する特徴を備えている。船首と船尾が上に向かってそびえているが、その高さはバイキングの船よりも高い。これは外海の高い波を乗り切るためのものであり、ナイル河のさざなみには必要ない」[6]

別の専門家は、注意深く巧妙に設計されたこの奇妙なピラミッドの船を見て「外海を航海する船としては、コロンブスが入手できたいかなる船よりも優れている」と語っている。[7] さらに専門家たちの一致した見解によれば、このような船が建造できるのは「外海で航海をした長い経験と伝統が

ある人々だけだ」という。[8]

エジプトの三〇〇〇年の歴史の初期に、この船を造ったのは誰なのか？　陸地に囲まれたナイル低地で畑を耕していても、「外海で航海をした長い経験と伝統」の蓄積はできない。どこでこの船の建造者たちは経験を積んだのか？

謎はもう一つある。古代エジプト人は様々な縮小版をつくるのが上手であり、シンボルとして多くのミニチュアを作製してきた。[9] したがってエジプト学者が言うように、これが死んだファラオが天国に行くための霊的な船だとしたら、なぜこのように大きくて高い性能を持つ船を埋めるような、面倒なことをしたのか理解に苦しむ。[10] そのような目的ならもっと小さな船体で済むし、数隻でなく一隻あれば十分だ。したがって論理的には、これらの巨大な船にはまったく別の目的があったことが考えられる。あるいはまったく別の象徴的な意味があるのかもしれない。

ようやく南面の真ん中ほどまで来た。ここでようやくなぜこのように長い道のりを歩かなければならないのかがわかった。目的は、東西南北にいる守衛たちにささやかな贈りものを配って歩くことだったのだ。これまで支払ったのは北面で三〇米ドル、東面で五〇エジプト・ポンドだったが、南面でも五〇エジプト・ポンド払った。昨日、アリはこれらの警備員にすでに賄賂を渡しているはずなのだが・・・。

「アリ、いつになったらピラミッドに登るんだ？」ときつい声で聞いてみた。

「すぐです、ミスター・グラハム」と案内役は言い、自信に満ちた様子で前に歩き始め、暗い前方を指さし「南西の角から登ります・・・」と言った。

第34章　永遠の住みか

夜のピラミッドに登ったことがあるだろうか？　それも逮捕される恐怖に怯えながら、神経がすり減っている状態で・・・。

それは驚くほど骨の折れる仕事だ。とくに相手が大ピラミッドのせいもあるだろう。頂上から九・四二メートルの部分はなくなっているが、それでも地上から一三七・二八メートルの高さがある。[1] 石は二〇三段も積まれており、一段の高さは平均すると六八センチになる。[2]

だが平均値というのは曲者だということが、登りはじめてすぐにわかった。段の高さは大きく異なり、ある段は膝までしかなく、別の段は胸の高さほどもあり、大障害物になった。さらに段と段との間に水平に横たわる足場の幅は非常に狭かった。多くの場合は足の幅ほどしかない。さらに巨大な石灰岩は下から見ると堅固に見えたが、実際には砕けやすくてすぐに崩れた。

三〇段ほど登った後、サンサも私も自分たちの思いつきがとんでもないものだったことを悟った。筋肉が痛みだし、膝や指は硬直し傷だらけになった。だが、まだ頂上までの七分の一しか登ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com